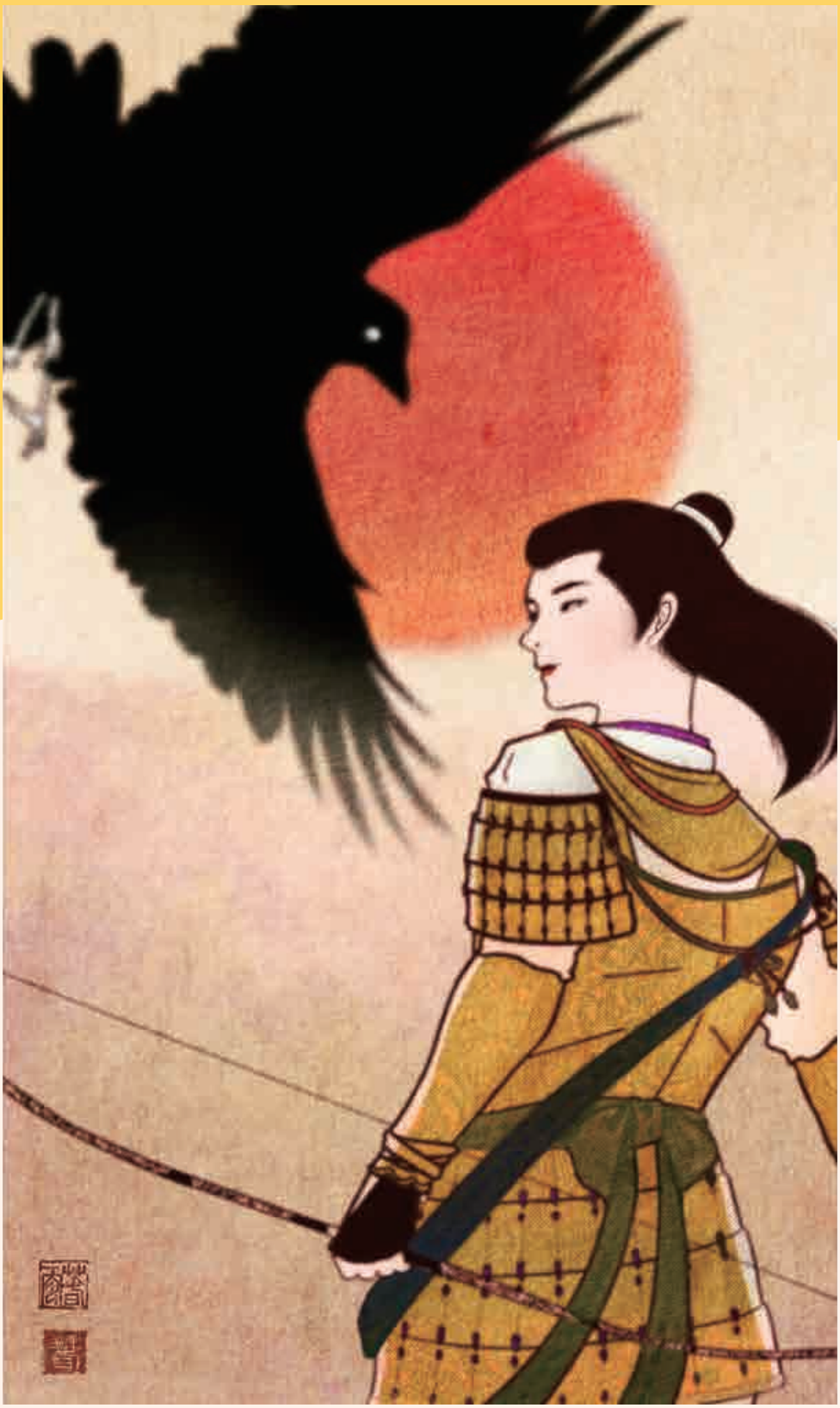
# 神道文化学部の就職力



「神武東征」　制作　明木春蚕（号）　神道文化学部在学生

もっと日本を。もっと世界へ。

KOKUGAKUIN UNIVERSITY 140th 1882–2022

KOKUGAKUIN Univ.

國學院大學

先生からのメッセージ

**黒﨑 浩行**教授
神道文化学部

## 困難に寄り添い、たちあがるための宗教文化をともに学ぼう！

令和２年から世界中で猛威をふるっている新型コロナウイルス感染症は、私たちの日常生活を一変させてしまいました。平成23年の東日本大震災をはじめとする大規模な自然災害も、ほぼ毎年のように各地で起こっています。

こうした状況は、今を生きる私たちにとって非常に深刻な問題ですが、過去に例がなかったわけではありません。宗教文化に目を向けてみると、災禍に向きあう思想や実践が含まれていることに気づかされます。現代では、それがどのように息づいているのでしょうか。

神道文化学部には、全国各地から学生が集まってきますが、地域によっては、過疎化・少子高齢化に起因するさまざまな課題を抱えており、地域に根ざした神社や祭りに、その解決のヒントがないかと探っている学生もいます。

このような問いに答えるための研究方法・アプローチはさまざまに考えられますが、神道文化学部での幅広い学びは、何かしら役立てられるのではないかと思います。

私自身は、東日本大震災での宗教者の支援活動や、被災後の復興過程で神社や祭りの存在が地域のレジリエンス（復元力、回復力）に果たす役割を、現地調査・インタビューなどにより探ってきました。

そうした現代社会へのアプローチ以外にも、考古学や古代神道史、近代の神道と福祉の歴史、比較宗教思想史など、さまざまな分野が関連してくることが、神道文化学部のカリキュラム全体を通じてわかることになるでしょう。

みなさんが、この困難な時代をともに生きるための手がかりとなるような「学びの輪」に飛びこんでくることを、心から期待しています。

**黒﨑先生はこんな先生！**

心優しく、穏やかな先生です。神道に限らず幅広い宗教文化の知識をお持ちなので、いつも適切なアドバイスをくださいます。

ゼミ生　吉田 雪乃さん

神道文化学部から一般企業へ

## 吉田 雪乃さん

神道文化学部　４年

一部上場企業内定

# 神道文化学部での経験と学びが、就職内定の決め手となりました

私は、社家出身ではありません。神道文化学部のことはテレビで神社の特集番組を見ていて知りました。当時高校生だった私は、進路を考える中で、日本や世界の宗教文化について学びたいと考えていました。すぐに学部のことを調べ、宗教文化について幅広く学ぶことが出来るカリキュラムに魅力を感じ、進学を決めました。

神道文化学部では社家出身でご奉仕の道を志す友人も多いのですが、居心地の悪い思いをしたことは全然ありません。入学時のアイスブレイクをきっかけに知り合った友人たちと、日々の授業を通して助け合いながら、神道をはじめとした幅広い宗教文化の知識を身につけることができました。

神職課程は履修していませんでしたが、厳しい実習に対して努力している友人の姿に、いつも勇気をもらっていました。私自身も、学部の授業に加え、教職課程やビッグバンドジャズサークルでの活動、アルバイトの両立に懸命に取り組みました。

３年次からの演習では、イスラム教のハラール食について研究することを決め、調査を進めました。

このテーマを選んだきっかけは、飲食店でのアルバイトで、ムスリムのお客様を接客したことでした。調査研究を通して、不自由な生活を送る人々のことを考えるうちに、「多様な人たちとコミュニケーションを取り合う「これからの暮らし」のために、何か役立つ仕事をしたい」と思うようになり、一般企業への就職を目指すことに決めました。

就職活動の面接では、必ずと言っていいほど、学部名に対して興味が示され、何を学んでいるのか、どんな研究をしているのか、等々の質問を受けました。他にはないユニークな学部だからこそ、自分がどんな思いからこの学部に入り、何を学び、何を身につけたのかを、ひとつひとつ具体的に説明することができました。

顧みれば、教職課程やサークル活動で、他学部の学生とも多く接点があったことで、様々なタイプの学生と情報交換を行っていました。こうした経験も踏まえ、神道文化学部と他学部の違い、そのユニークな学びと経験について、より印象的なアピールができたように思います。

おかげさまで、第１志望であった憧れの企業から内定をいただくことができました。内定先は、生活全般の商品を扱い、人々の生活に役立つこと、環境に寄り添うことを大切にする企業です。

私は学部では異色の学生だったかもしれませんが、入学して本当によかったと思っています。自分の特色、強みが何なのか、そして自分が何をしたいのか、気づかせてくれた場所が、神道文化学部でした。後輩の皆さんも、自分の強みを知り、それを活かして何がしたいのか、ということを常に考えながら、自らの道を切り拓いてほしいと願っています。応援しています！

**吉田さんはこんなゼミ生！**

吉田さんの研究は、現代日本の多文化状況にフェアなまなざしを注ぐものでした。

吉田さんならではの真摯な姿勢を活かし、社会人として活躍することを期待しています。

黒﨑 浩行 教授

先生からのメッセージ

**鈴木 聡子**助教
神道文化学部

## 一緒に学ぼう！

神道文化学部は、神道と宗教文化を深く学べる全国的に見ても珍しい学部です。神社でご奉仕するための祭式作法を学べる点も魅力の一つといえ、日本で生まれた神道を実践的に学ぶことで日本の歴史や文化そのものを肌で感じることができます。

また神道と他の宗教を比較することは、世界のさまざまな宗教文化を広く知ることにもつながります。日本がどのような文化を持っている国なのかを理解し、あらゆる場面で「日本」を発信できるようになるでしょう。

私自身、本学部の前身である文学部神道学科の卒業生です。学生生活では、同じ志を持つ仲間とともに、授業の内容などについて共に調べ、語り合ったものでした。大学での授業、そしてなにより先生方が素晴らしく、充実した学生生活を送ることができました。調べていく過程では、先生にも積極的に相談をしに行き、助言をいただきながら学びを深めていきました。

こうした経験が私にとって研究の出発点となりました。あの時の“学びたい”という一学生の姿勢を、大切に育ててくれた先生方の存在が、現在の教員としての私自身を培ってくださったのです。

学部卒業後は大学院に進み、岡田莊司先生の御指導のもと、各地の神社祭祀や祭礼について学び、そのような中で神社の年中行事を研究テーマとするようになりました。それ以来、今に至るまで、自らのライフワークに日々取り組み続けています。

神道文化学部には、友と切磋琢磨しあえる素晴らしい環境があります。
ぜひ、本学部で一緒に学んで行きましょう！

**鈴木先生はこんな先生！**

学生にしっかりと寄り添った指導をしてくださる先生です。
ゼミでは、私の研究テーマに合う参考文献などを紹介していただいたり、的確なアドバイスで研究の道標を示していただきました。

ゼミ生　**緒田 雅人**さん

神道文化学部から一般企業へ

## 緒田 雅人さん

神道文化学部　４年

一部上場企業内定

# 神道の学び、神社での経験が、就職活動で活きました

実家は代々神職の家系で、小さい頃から神社を身近に感じていました。進学のきっかけは、兄が神道文化学部を卒業して、地元の神社に奉職したことです。

「せっかく社家として生まれたのだから､自分もしっかりと神道を学びたい…」そんな思いで、神道文化学部への入学を決めました。

入学してから２年間は、「神社実習生」として都内の神社に住み込みました。昼間は神社でご奉仕、夕方から大学で授業を受けるという毎日です。

実習生としての学生生活は、大変な事も多かったのですが、ご社頭に常駐することで、地域の方々・参拝者の方々と、深くお付き合いする事ができました。神職を目指す者として、実に得がたい経験を積むことができたと思います。

３年次に進み、卒業後の進路を考え始めました。実家が奉仕する神社は決して大きなお宮ではありません。お宮だけで生計を立てる事は難しいので、どこか大きい神社でご奉仕しながら実家を手伝うか、あるいは一般企業に就職して「兼業神職」としてご奉仕するのか、そのいずれかの二択でした。

かなり考え込みましたが、決め手となったのはやはり兄の存在でした。神社の後継者としては兄が居たので、私は土日祝日などの休暇を取りやすい一般企業に就職し、神社が忙しい休日に兄をサポートしていこうと考えました。こうして一般企業への就職という進路が私の目標になったのです。

４年次、実際に就職活動が始まりました。なにせ神道文化学部は、日本でただひとつのユニークな学部です。面接官から「神道文化学部って何を学ぶ学部なの？」というような興味津々のお尋ねをいただきました。大勢の志望者の中にあって、この学部出身者ならではの「差別化」を、自ずから図ることができたのです。

神道文化学部は、神仕えする者の「まごころ」を培う学部です。就職活動において、自らの「まごころ」と「誠実さ」を、ごく自然にアピールすることができました。おかげさまで無事に第一志望の企業から内定をいただくことができたのです。

卒業後は、社会人としての生活が待っています。神職として、人として、大きく成長できるよう、弛まぬ研鑽を重ねていきたいものと願っています。

**緒田さんはこんなゼミ生！**

コロナ禍で調査・研究する環境に制約があり、苦しい２年間であったと思います。自身の研究テーマについて､どのように調べるのが最善か熟考し、ひたむきに頑張っている姿が、とても印象的でした。

鈴木 聡子 助教

先生からのメッセージ

**藤本 頼生**教授
神道文化学部

## 「共生の時代」を生き抜くための知恵と価値を探そう

神道は、特別な宗教生活や特定の教義に基づいた倫理的な生活を実践することによって、個人の心が救われるというものではありません。

この日本という地域のなかにおいて、お互いの生活を理解しながら、人々がともに平穏無事に、創造的に暮らしていこうという見えざる意識のもとに、神々を祀ることで、さまざまな文化的な意味付けと多面的な価値を見い出し、社会をともに生きてゆくための方向性を与えてくれるのが、神道の宗教的役割の一つです。

そして、地域の人々の意識のつながりが具体的な儀礼として表現されているのが、神社の祭りであり、鎮守の森と称される神社の場としての特性です。地域ごとに多様な形で斎行されてきた神社の祭りや地域の民俗・習俗には、人々のつながりや、明日を生きるための活力の源泉をみることができます。

それは、ＳＤＧｓに象徴されるこれからの持続可能な共生社会を生き抜くための日本人の知恵でもあり、古来より築き上げられてきたわが国の宗教信仰のあり方の一つです。

神社の組織や活動に際して起こる種々の問題を調べ、考えることは、地域に所在する人々と神社との関係性や、多くの人々を束ねる祭りのあり方、日本人にとって「神(カミ)」とは何かという問題を考えることでもあり、神社の社会的、公共的な性格を考えることにもつながります。

当該の問題へのアプローチや研究・調査を手助けするのも本学部の教員の役割の一つです。

日本人が長年にわたって考え、作り上げてきたモノと心のカタチである神道文化を、ぜひ一緒に学んでいきましょう！

**藤本先生はこんな先生！**

藤本先生は、ご専門の神道教化はもちろんのこと、様々な領域をカバーする幅広い知見をお持の先生です。

私の「こんなことをしてみたい」というぼんやりとした興味に対して、それを先生の視点にぐっと引き寄せて、具体的な事例に即したアプローチを示唆してくださいました。

ゼミ生　**黒田 裕香**さん

## 黒田 裕香さん

神道文化学部　４年

神社奉職内定

# 母国を知る学びが、世界への扉を開きました

私は一般家庭の出身者です。社家の子弟ではありません。しかも高校までは理系コースでした。神道については、ごく一般的な知識しかなく、日本史や古文さえも必要最低限しか勉強していませんでした。

そんな私の転機は、高校時代、海外留学での気付きでした。「生まれ育った母国の文化を学ぶことが、そのまま世界への扉を開くことに繋がるのだ…」この思いにふさわしい学びの場を探し求めた結果として、神道文化学部への入学を決めたのです。

顧みれば、この４年間というもの、この学部でしか学び得ないことを幅広く知り、自分の興味を深く掘り下げてゆくことができました。３年次からの基幹演習では、初年学時「宗教学」の授業で憧れていた石井研士教授のゼミに入りました。本学図書館の膨大な蔵書を活用しながら、自分がいったい何を研究したいのか、そのためにどのようなアプローチが必要なのか、じっくりと考え抜くことができました。

４年次からは、藤本頼生教授のゼミに加わり、現場に飛び込むフィールドワークを通して、理論と実体験の擦り合わせを行いました。コロナ禍ではありましたが、自分の関心に没頭出来る本学ならではの学修環境は、とても有り難いものでした。

課外活動は、神楽舞サークルを選びました。幼い頃からクラシックバレエを続けてきた私は、「身体表現」という慣れ親しんだ入り口から、「和の作法」を体得しようと考えたのです。とりわけ私たちの代は、神道文化学部以外の他学部生が多い学年でした。全員参加の役職分担で皆が協力する仕組みを作り、定期のお稽古や交流会を通して、最後まで仲良く活動を続けることができました。

学生生活で最も忘れ難い思い出は、３年次の観月祭です。本学ならではの風物詩として引き継がれてきた観月祭でしたが、コロナ禍でその実施が危ぶまれました。YouTube配信という形の斎行が決まったのは、本番の僅かひと月前でした。関係者に一人でも感染者が出たら即中止、という厳しい制約下、観月祭は無事成功しました。すべては私たち学生を温かく見守ってくださったサポーターの方々のご配慮の賜物です。只々深く感謝しております。

この４月から、久しく助勤でお世話になっていたお宮へ奉職致します。常に自らを謙虚に顧みながら、一日、また一日と努めて参りたいと願っています。

**黒田さんはこんなゼミ生！**

黒田さんは、前期の演習で発表した際の私のアドバイスに対して、単に論文などの文献の探索にとどまらず、コロナ禍が落ち着いたわずかな時期を見計らって緻密な調査計画を立て、熱心にフィールドワークを行っていました。先学の研究を参考にしつつも、自身の目で見ることを重視し、真実を謙虚に探究しようとしていたゼミ生であったと思います。

藤本 頼生 教授

卒業生からのメッセージ

**菊地 広野さん**
第127期（平成30年度）卒

## 卒業後、IT企業で「神社を次世代に繋ぐ仕事」に取り組んでいます

スマートフォンで世界中の情報が瞬時に手に入る時代になりました。私が神道文化学部を目指したのは、「そんな時代だからこそ、まずは日本を深く識る必要があるだろう」と思ったことがきっかけです。

私は神社で奉仕する家筋に生まれたわけではありません。入学当初、授業で聞く単語はどれもはじめてのものばかりでした。けれども、かけがえのない友人たちに恵まれ、各々助け合いながら、充実した大学生活を送ることができました。

在学中、大学の行事には積極的に参加しました。観月祭では、写真撮影や記念冊子の制作など、行事を裏側から支える活動を率先して行いました。特に、記念冊子の作成では、出演者だけではなく、裏方の学生が活躍する姿も掲載しました。観月祭が大勢の学生の努力で成り立っていることを、冊子としてしっかりと表現できたと思っています。課外活動では、学園祭で神輿渡御を運営するサークルに所属しました。行事の運営も学生主体で分担し、大きなお祭りを執り行う大変さを、身をもって体験しました。

就職活動では、企業説明会やインターンに積極的に参加しました。とりわけ神社寺院の検索アプリを運営するITベンチャー企業で、ウェブエンジニアの長期インターンを経験させていただきました。その結果、同社から内定を頂戴し、新卒として入社する運びとなりました。現在もその会社で、IT技術を駆使して「神社を次世代に繋ぐ取り組み」に、日々奮闘しています。

神道文化学部には、他の大学ではあり得ないユニークな「学びと経験」が満ち溢れています。私も4年間の大学生活で、たくさんのことに挑戦し、自分の幅を広げることができました。

志願者の皆さん、神道文化学部で日本文化の何たるかを学びましょう！　「和の文化」の神髄を、身をもって体験しましょう！

**菊地さんはこんな学生でした！**

菊池さんは、その卓越したITスキル・カメラワーク・デザイン力によってわが学部の年中行事を力強く下支えしてくれました。ITに通じた神社サポーターとして、得手を駆使した愈々の活躍を、心から期待しています。

武田 秀章教授

## 神道文化学部独自の各種講座

神道文化学部では、就職・奉職、および就職・奉職の「その先」を見据え、素養とスキルを高めるための各種講座を開催しています。（無料）

女子学生のための就職セミナー

マナー講座

書道講座

和歌講座

衣紋講座

田んぼ学校

御幣講座

**オープンキャンパス（渋谷キャンパス）**　8月6日（土）・7日（日）・27日（土）　お問い合わせ：入学課　電話 03-5466-0141

※学年は取材時のものです
表紙　「神武天皇」　制作：明木春蚕（号）（神道文化学部在学生）